

花影の花

—大石内蔵助の妻—

平岩弓枝

新潮社



花影の花
—大石内蔵助の妻—

平岩弓枝

新潮社

花影の花 はなかげ
大石内蔵助の妻 おおいしくろのつま

一九九〇年二月五日発行
一九九一年六月一〇日四刷

著者 平岩三枝 ひらいわみえ

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 (業務部) 〇三―三二六六―五一―二
(編集部) 〇三―三二六六―五四―二
振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Yumie Hiraiwa 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327908-7 C0093

目 次

第一章	赤穂の春	7
第二章	主税 ^{ちか} 誕生	37
第三章	妻の座	65
第四章	細 ^き 波 ^{なみ}	89
第五章	山科へ	113

第六章 離別 136

第七章 遠い雪 164

第八章 去り行く人 188

第九章 大三郎の出世 211

第十章 桜花のかげ 235

花影の花

大石内蔵助の妻

第一章 赤穂の春

一

中庭をへだてて鉤かぎの手になっている奥座敷から聞えて来る夫婦のいい争いの声が、次第に高くなつて行くのを、りくは耳をふさぎたい気持ちで聞いていた。

もう、制とめに入らねば大事になると思う一方で、自分が出て行かぬほうがよいのではないかと迷いもしている。

夫婦の争いに、姑しやうとめが口をはさめば、一層、こじれるということをし、りくはとづくに悟っていた。「夫婦争いは二人だけにしておけば、それなりに片づくものを、あの家は、姑どのが要らぬ口出しをする故、溝が深うなる」

大三郎が最初の妻と離別した時、間に入つた仲人が、愚痴まじりに嫁の実家で、りくを非難したというのは、藩中の評判であり、りくの耳にも入っていた。

まるで、姑が嫁をいびり出したような、その噂に、りくは逆上し、無責任な世間の口を怨み、大三郎を責めもした。

二度目の、今の嫁は遠縁に当る岡田竹右衛門幸元という者の娘だったから、縁談がまとまる前に、りくは当人に会って息子の離別の内情について釈明をした。

「御家老、浅野帯刀様のお嬢様が、大石家をお去りになった理由は、外衛様が外の女子に子をお作りになったせいとかがって居ります。別に、お姑様と確執があったとは聞いて居りません」やがて、嫁になる女に、はつきりいわれて、りくは、ほっとすると同時に、弁解などするのはなかったと後悔したものであった。

が、二度目の妻とも外衛はしつくり行かないようであった。

外衛というのは、大石大三郎の元服してからの名で、大三郎は幼名である。

奥座敷の罵り合いが激しくなった。

りくには、この屋敷の奉公人達が息をひそめ、耳をそばだてているのがよくわかる。辱かしかった。

この屋敷の奉公人は、いずれも、りくが大三郎と共に、広島へ来てから召し抱えた者ばかりであった。彼等の口から、夫婦争いの顛末が世間に知れ渡る。それも、今に始まったことではなかった。

悲鳴が聞え、物の倒れる音がした。

遂に、りくは障子を開けた。

廊下に、用人が及び腰で奥を窺っていたが、りくをみると、なんともいえない表情で頭を下げる。

奥座敷は、庭に面した廊下側の障子が倒れていて、それに折り重なった恰好で嫁の伊代が突っ伏していた。鬚がこわれ、片手でおさえている頬が赤く腫れ上っている。

大三郎は、と見ると、これは座敷の真中に仁王立ちになり、肩を大きく上下させていた。

「伊代どの、どうなされました」

とりあえず、りくが抱き起すと、嫁が顔をひきつらせて叫んだ。

「ごらんの通りでございます。私がいつたい、なにをしたと申すのでございましょう。落度もない者を打擲うちうちやくなさり、御自分の非を棚に上げて……」

「うるさい、黙れ」

大三郎がどなり、伊代は姑かあを楯たてにして夫に向った。

「いいえ、今日はお姑様かあさまの前で、黒白をつけて頂きます。私の申すことが間違っているのか、旦那様のなされ方が悪いのか……」

「母上にはかかわり合いのないことだ」

「世間が、なんと申しているか、お姑様にはご存じでいらっしゃいますか。仮にも、大石内蔵助おおいのくらのすけの倅せがれともあろうお人が、御家中の侍と武芸を競うでもなく、学問に群を抜くでもなく、ただよからぬ人々と遊所に通い、酒を飲むやら、女を囲うやら、あれでは殿様お情けの千五百石せんごひゃくごくが泣くと……」

「ああ、これ、伊代どの」

出来ることなら、嫁の口を封じたいと、りくは思った。

この女むすめも、前の嫁と同じ眼で、いや、世間の多くの人々と同じように、大三郎を見、貶さげすんでいる。

「大三郎とて、その辺りは心得て居りましょう。なれど……」

「御承知なら、何故、お改め下さいませぬ。旦那様の恥辱は、旦那様お一人のものではございま

せん。縁につらなる大石一族の恥辱と、実家の父も申して居ります」

「黙れ」

血の気のない顔で、大三郎が繰り返した。

「なにも、親類縁者でいてもらおうとは思わぬ。いやなら一族の縁を切つてやる」

「それは、あなたの御勝手と申すものでございます」

「なに……」

「大石内蔵助良雄様の縁につながる者は、みな、そのことを嘗はまれにして居ります。あなた様だけが、亡き父上の御名を辱はなかしめて……」

「伊代どの」

夢中で、りくは伊代を押えた。

「どうぞ、もう、なにもいうて下さるな。大三郎には私から申します。あなたはあちらで顔の手当てをなさいます」

そういわれて、伊代は腫れのひどくなった頬に気がついたらしい。

「梅……梅は居りませぬか」

自分が実家から伴つて来た女中の名を呼びながら、廊下を居間のほうへ去った。

りくは立ち上つて、障子を引き起した。

棧が折れていて、どうにもならない。障子一枚を取りかえさせることで、また、噂が大きくなるだろうと吐息が出た。

「立つて居らずと、おすわりなされ」

唇を噛みしめて慄おそえている大三郎に声をかけ、りくは座敷に散らばっている煙草入れや懐紙、

紙入れなどを拾い集めた。大三郎が手当り次第に投げつけたものである。手文庫がひっくり返っていた。散らばっている書付を手にとってみる。勘定書であった。二枚、三枚、およそ十枚余り。大三郎が気がついて、りくの手からそれらをひっそらった。が、りくの眼は素早くその何枚かを読んでいた。呉服物の店の名があり、料理茶屋らしいのがあった。

「弥津に少々のものを買うてつかわしたのでございます。それを嫉妬して……」
弁解がましく大三郎が訴えた。

弥津というのは、大三郎が料理茶屋の女と深くなつて産ませた娘であつた。いわば妾腹だが、大三郎には他に子供がないので、りくは、なんとか屋敷へ引き取つて育てたいと思つたが、大三郎の最初の妻の抵抗に遭つてそのまま、妾宅のほうでお松という母親が養育している。

りくは大三郎から禁じられているので会いに行つたことはないが、もう九歳になつてゐる筈であつた。

大三郎はおそらく、その娘と母親にせがまれて呉服物を買ひ与えたのであろうが、たまたま、それを手文庫の中から、伊代がみつけて、今日の争いの口火になつたものとみえる。

「手前が遊興にばかり散財すると申すのです。自分は母上が質素儉約をきびしくおっしゃるので、帯一筋買うたこともないのにと……」

母親にいいつけてゐる息子の口調は三十を過ぎた武士らしくもなく、子供子供していた。

この子には育ちそこねた部分があるとりくは思つてゐた。

それは、もしかすると生まれてすぐに知り合ひの眼医者の家へ養子に出したせいではないかと考える。

それは、やむを得ない措置であつた。

今でこそ、武士の鑑かたみといわれている元禄十五年の仇討だが、その当時、幕閣は謀叛人くわへんじんとして四十六人を処罰した。

謀叛人の子として誕生した大三郎に、なんとか罪の及ばぬよう、せめて命永らえさせたい親心が、赤ん坊を他家に養子に出すと決めたのだったが、母親にしてみると、自分の乳をろくに吸わずに育った子が、なにか大事なものを忘れて成長したように思えてならないのであった。

「弥津のことは、折をみて伊代どのと談合し、屋敷に引取るようにせねばと思うて居ります」それはそれとして、大三郎自身、今少し量見せねばならないとくは、息子に説いた。

「そなたの苦しい立場はようわかるが、やはり、世間は大石家の跡継ぎとして、そなたをみているのです。殿様の御恩を思うても、遊興に時を費している場合ではありませんまい」

まだ十二歳だった大三郎を、豊岡から広島へ呼びよせ、亡父と同じ千五百石を与え、家臣に加えた。

「御主君が手前を召し出されたのは、大石内蔵助の忤を家臣にしたことで、諸大名に自慢をなさりたかったからでございましょう。第一、父上が御奉公申していた赤穂あこうの浅野家は、この芸州浅野家の分家筋。分家の忠臣の遺子を、本家が厚遇するのは当り前ではありませんか」

それが、この頃の大三郎の口癖であった。流石さすがに、外では口外しないが、母や妻には平然といふ放つ。

りくは眉を寄せ、声をひそめた。

「左様なことを、間違うても口にしてはなりません。その量見が、そなたを未熟者に行っているのです。殿様が若輩のそなたに千五百石の高禄を下されたのが、そなたの父の忠義のためであるのなら、そなたもそれ以上の忠義を以て、殿様に御奉公せねばなりません。それでこそ、御家中の

方々も、そなたを大石内蔵助の子とお認め下されましょう」

「母上」

ふっと、大三郎の聲が笑った。

「手前は何故、大石内蔵助の子になぞ、生まれたのでしょうか。いっそ、丹後の須田村の眼医者の
俸であればよかった……」

「大三郎……」

「母上もそうではありませんか。何故、大石内蔵助などと申す男の許へ嫁いのですか。母上が
大石家へ嫁がれなかったら、手前は……」

低く笑い出した大三郎の聲が、やがて嗚咽おとに変わるのを、りくは茫然とみつめていた。

何故、自分は大石内蔵助良雄という男の妻になったのか。今まで考えてもみなかったそのこと
が俄はかに胸の中に湧き上って来た時、りくの思い出の中には雪が降り出していた。

二

豊岡にその年初めての雪が一尺近くも積った日に、りくは父に呼ばれて居間へ行った。

お城から戻って来たばかりの父は、すでに着替えをすませ、祖父からゆずられた桑材の机にむ
かって文を読んでいた。

その文は、今日の昼すぎ、飛脚が雪にまみれて届けに来たもので、取次いだ用人から、それを
受け取った母が、差出人を聞いて僅かながら表情を変えたのを、りくは少し離れたところからみ
ていた。

用人は、文の差出人を、

「赤穂の……大石様……」

と母に告げたようであった。

りくが、赤穂の大石家の名を耳にしたのは、それが最初ではなかった。

ずっと以前、たしか、祖父の石束毎術が歿する数日前、父の毎好が祖父の枕辺で、

「赤穂の大石殿との約定のこと、しかと承りました。折をみて、先方と談合致し、りくが成人致しましたなれば、必ず……」

と話しているのを母の傍で聞いていた。

で、あとから母に、おじいさまのおっしゃったのは、なにか、と訊いてみると、

「そなたは、おじいさまが大坂にお出でいの時、赤穂の浅野家の御家老、大石様とお約束をなされて、大石様の孫息子どのに嫁ぐことになっているのですよ」

と教えられたのが、そのはじまりであった。

まだ十歳だったりくには、赤穂がどこかもわからず、嫁に行くことにも実感はまるでなかったが、父はともかく、母は、この祖父同士の取り決めに喜んでいなかったのが、その後の言葉の端々に窺われた。

理由は、赤穂が遠すぎることであり、相手の大石家の孫息子が、りくよりも十歳も年長であることなどであったが、どちらも父に一蹴されていた。

但馬と播州は、それほど遠い距離ではなし、また、十歳の年の差も世間には珍らしいことではない。それよりも、石束家は京極家の家老として千二百石の身分であり、大石家も浅野家の家老で千五百石、身分からいっても釣り合いのとれた良い縁組であると、父はむしろ、喜んでいた。